

---

# 誰か続きを書いてくれシリーズ

篠原

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誰か続きを書いてくれシリーズ

### 【Nコード】

N0856I

### 【作者名】

篠原

### 【あらすじ】

完結する気がしない作品。一応気が向いたら続きを書くこととは思っていますが、他にこの設定で小説の続きを書きたいor書いてもいいかもと思っている方は是非お願いします。という何とも投げ槍作品。第一弾は学園もの。

## まずは自己紹介（前書き）

ハチャメチャな設定ですが、お付き合いしてくださると嬉しいです。

## まずは自己紹介

新人生というのはどんな時代でも同じもの。

これから新しく始まる環境に対し多少の恐れを抱きつつも、反対にそのことに対して高揚感を隠せないものだ。

だけど、そいつは今までの奴とは違った。

そいつは、

「出席番号10番、紀乃<sup>きの</sup> 基これから色々トラブル起こしていくつもりだから、みなさんどうぞよろしく！」

新人生一番最初の難関でもある自己紹介、これはクラスメイトに大事な第一印象を与える場でもある。

しかしそいつ 紀乃はあきらかに第一印象最悪の自己紹介をし始めた。

始終ニコニコしつつ、その爆弾発言から始まり、次は自分の中学の頃の武勇伝まで話し始めたときは教師ですら啞然としていたものだ。

そして、ようやく全て言い終わったのか一息つくと、再びよろしく！と元気に告げ自身の席へと戻った。

しばらく教師もポカンとしていたがすぐさま我に返ると、次の者を呼び出す。

次のものは、紀乃の発言のせいで少々びくびくしつつも、他の生徒と同じように当たり障りのない紹介をして去って行った。

と言っても、あんな馬鹿な自己紹介したやつは、紀乃が最初で最後だったか・・・

そして、その日はそのまま学校案内、校則の説明、授業についてと簡単に説明を受け、最後にSHRがあって終わった。

クラスの大体の奴は、他のクラスにいてであろう友人のもとへと今日のことを言いに行っただろう。

紀乃は、たった1日にして学年全員に知れ渡る人物となった。

## まずは自己紹介（後書き）

続きを書きたいor書いてもいいかもという人へ

- ・もし書かれる場合はお手数かけますが、せめて報告などしていたけると嬉しいです。
- ・微妙なところを引き抜いて書いたり、跡形もないような改編などは、すいませんがご遠慮ください。あくまでもこれをベースにしていたけると嬉しいです。
- ・分からないことなどありましたら気軽にご連絡ください。

それでは

なんにしろ、ここまで読んで下さりありがとうございますございました。

## 頭髪検査バトル

「おーい、大河ー！！頭髪検査、第二体育館だつてよー！！」

「おう！今行くー！！」

そう言つて俺　　大河は、呼ばれたほうへと走つて行つた。

ハッキリ言つてここは、なかなか非常識な学校である。

私立月影学園<sup>つきかげ</sup>

この月影学園は、私立と言つ割に実は授業料などなどはそこまで高くない。話しに聞くに、どこその有名会社や大学、専門学校など手を結び、(さすがに本人の意見も聞くが)優先的にその学校や会社に生徒を売る・・・もとい、進学、就職させるのでその辺のお金は工面してもらつているらしい・・・

だが、そのため偏差値はなかなか高く、へたをすればその辺の公立高校よりも高い。

まあ、その代わりと言つてはなんだが、結構校則は緩かつたりする。携帯等はもちろんのこと、授業中さえ使わなければ登下校中のウォークマンの使用、携帯ゲーム機、マンガ、下手をすれば自分のパソコンなどオールOKだ。

しかも、歴代の卒業生やその保護者達が何を思っているのか、投資しまくつてるおかげで5年前にどこかの大学跡地を購入。

馬鹿みたいに広い土地を使い校舎を建てるどころまで良かったのだが、何を思つたか校長はその後体育館を2つ、講堂を一つ、10コースもあるプールに寮や校舎の隣接に保健室(室と言つ規模ではなく、もはや病院)ついでに全校生徒は余裕で入りそうな食堂に教室から外をのぞけば何のためにそんなに広くしたのか頭を悩ませたくなるほどの大きすぎるグラウンド・・・そして何といても極めつ

けはプラネタリウムなど娯楽施設がちゃっかりと備わっているところだ。

おかげで最初、親に金などの事情からここに入れといわれ、とりあえず特に行きたい学校もなかった俺はオープンスクールへ行ってみて、最初に思った。

どこの金持ち学校だ・・・

そして次に思ったのは、絶対にここの生徒になりたくない。

だが現実はその甘くもなく、あれよあれよと言ううちにここの願書を提出され、上手く言いくるめられて推薦を受けに行き、めんどくさかったので面接も小論文も結構テキストにすませた割にすんなりと合格届をもらった。

合格届を受取りに行った先生曰く

「根性や忍耐がありそうな好青年でしたので。確かに小論文はある意味アレでしたけど、中学の成績は申し分ない」  
だそうだ。

どんな判断基準だ。これでは真面目に受けに行つて落ちた他の生徒にもものすごく申し訳ないような気がする。

だが、そんなことをつらつらと思う俺のことなどおかまいなしで、月日は経ち、推薦で通つたため他の学校を受けることもできないまま卒業式が行われ、ついに入学式・・・

何故か市の大きなホールを貸し切つての盛大な入学式、しかし途中で有名人が乱入しコンサートへと化す。

普通そつというのは入学式にやるのではなく卒業式にやるものだ。

そつしてなんとか30分オーバーの入学式が終わり、明日からようやく普通の授業開始、というところで教師からぶち壊しの一言。

「えー・・・今年の一年生に頭にスプレーかけてきた生徒がいた為、明日の1〜2時間目を潰して臨時の頭髮チェックをします」

まったくもって意味が分からない。と、というか何があってそのような状況に至ったのか知りたい。

俺の日常は一体いつになつたら帰ってくるのか・・・

そう溜息をつくとき、明日のことに頭を痛めながら大河は帰路についてた。

そして現在にいたるわけである。

ちなみに、今となりで楽しそうに昨日の部活見学について話しているのは白木陽平。

昨日の自己紹介などが終わった後の休憩、気まずそうに座っている者、積極的に声をかけに行くものと様々な人がいる中、俺はそんなことに目もくれずゆっくりと読書をしていると、急に隣から声をかけられた。

最初は煩わしく思っていたが、一言二言交えるうちになんだか意気投合してしまった。

パンっ

俺が、そんなことを思いながら歩いていると急に目の前で手を叩かれた。

それは結構いい音であり、思考の奥に沈んでいた俺は突然のことに驚く。

「お。気づいた？」

「って、何しやがる！」

「や、さっきから何度呼んでも反応がねーからさ。どうした？」

「え。マジか？」

「俺お前がぼーっとしてるのに気づかなくて5分ぐらい独り言話してただぜ」

「あー…悪い」

どうも考え事をする周囲が見えなくなる俺の悪い癖。治すように思っているがこの体に染みついた癖はなかなか抜けそうになかった。

とりあえずそのことを素直に謝ると白木もわかってくれたようで、いいつてことよ！と元氣よく俺の背中を叩いてそのまま二人で笑い合い体育館へと向かった。

\*\*\*\*\*

.....

一言で表すなら「修羅場」

詳しく説明しろとか言われれば・・・

すこし迷いつつもどうにか体育館へと到着し、普通の体育館ドアのクセにやけに重い扉を開けてなかに入ってみると、そこはすさまじい風景だった。

女子と男子が別々に並び、その列の先では4人がかりで頭髪チェックをしている先生達・・・

そこまでは普通？の頭髪検査なのだが、問題なのは

「横山君、ここ染めてるわよね？」

「はあ！！？染めてねえよ！！」

「嘘よ、こんな色自然に出るわけじゃない」

「うつせーよババア！！出たんだからしよーがねえじゃねえか！！」

！」

「はいはい。ペナルティー1よ。3つたまつたら慈善授業だから、覚えておいてね」

「あ？誰がいくかつつの！ったく、うっぜーな」

「横山君、ペナルティー2」

「あ！っつめ、クソババア！何つけてやがる！！！」

「目上の人間に対する言葉がなっていないわね。ペナルティー3よ。更生班！！！」

あるところで、どうやってここに入ったのかと聞きたくなるぐらい口の悪い男子にからまれていた女性教師は、今にも襲いかからんとする男子に臆することなくどこかに向かって叫ぶと、まるでSATのような格好をした人たちがさつとその男子の両脇を固めて身動きを封じる。

突然のことに驚き振りほどこうとするがそれはびくともせず、女性教師が男子の両脇を固めている人物たちに「言葉づかいを直した方がいいからC-2でお願い」と言うと、それらは敬礼をするとその男子を無理やり連れて行ってしまった。

他にも、先生にかみついてはなれそうにない女子の姿や、華奢な女性教師なのをいいことに言いくるめようとしたいかにも体育系のごつい男子が一瞬にして巴投げを喰らわされていたり、カメラで写真を撮り、科学的にどうこう説明している教師までいる。

正直、

「普通に頭髪検査しろよ……」

つーか、結局あのSATみたいなのはなんなんだ！という疑問は

「うっわー！！っすっげー！何だアレ！？かけー！！！」

隣でおおはしやぎする白木によって封じ込められた。

その日結局並んで待っている間も教師VS生徒というなんとも奇妙な光景を背景に、大河と白木はおとなしく検査を受けて帰った。

そしてその日の帰り、今日は部活参加がないということで白木と一緒に帰っていると、何故か商店街の入り口で何やら演説をしている男子をみつけた。確か今日更生班とやらに連れて行かれた横山だ。いったい何をやっているのかと不思議に思っている

「あー、確かに演説とかがって言葉づかい治りそうだな。政治家って口八丁で上手いことやってるし」

いや、そういう問題でもない気がするが・・・  
とりあえずその日はなにもみなかったこととし、大河は何事もなく帰路へと就いた。

## 頭髮検査バトル（後書き）

相変わらずめちゃくちゃな設定ですいません。

そして重要キャラっぽく最初に紹介した紀乃がほとんど出てこないのは気のせいです。別に忘れていたわけでは…

とりあえず、ここまで読んで下さりありがとうございます。

## ブルー・デイ

なんやかんやでようやく普通・・・？の通常授業がスタートする。ちなみに、なんでハテナがついているかといえば、もはやこの学校ではほかの学校では普通でないことが“普通”なのだ。

例えば大体1年の最初の授業と言えば大体は先生の自己紹介から始まり、最初、ということもありそれで潰れてしまうこともあるのだが、それは1限目の数学によって覆された。

抜き打ちテストならばまだわかる。たまに生徒たちの実力が知りたということで行う教師がいるのは知っているが、それはあくまでも“小テスト”である。だがこれは、どうみても

「（某大学の入試問題じゃねーか！！！！）」

しかもムカつくことに日本で1位を競うようなレベルの高さだ。

さらに腹立つことは、教師は生徒たちにそれを渡し思いきり余裕そうな顔だ。思わず窓から差し込む太陽光が反射するその頭に残っている、わずかな希望を抜き取ってやりたくなる。

つか、斜め前の紀乃が何事もなく爆睡していることにもものすごく腹が立つ。

とはいっても、やらなければ後で何をいわれるかわかったもんじやない。

そう思った大河は覚悟を決めた顔で最初のページをめくるが、そこはいきなり文章問題。

大体最初は肩慣らしの単純計算問題だろ！？とツッコミたくなるが、よくよくみるとどこか小細工した形跡があり、どうやらあのハゲはただ単に計算して点数を取らせるような問題を作る気はないら

しい。

あくまでも問題文から意味を汲み取り正しい計算式を作り上げ、答えを導き出せということか。

それを悟った瞬間、負けん気の強い大河はやる気が増大されるが問題文をよみとり一言

「（って、これまだ習ってねーよ！！！！！！）」

どうやって解けと！！！！？

もともと某大学の入試問題、という時点で気付くべき問題なのだが、もはや常識の通じないこの学校に流されていた大河はすっかり大事な部分を見逃していた。

それでも、偏差値も高いと聞いていただけあって一応高校の予習は教科書を見たりして、独学ではあるが一応勉強はしている。

とりあえず応用問題は捨てるとして、白紙で出すのもアレなので一応あがいたあとを残しておくでしょう。

そしてそれから40分後、どうにか最後のページまでたどり着く。さすが某大学とあって解ける問題は数えるほどしかなかったが（それも正解を導き出せたのは1〜2個だけだ）どうやら次のページで最後らしい。

後のこり10分しかないことも考え、さっさと終わらせてしまおうと気合いを入れ直す、最後の問題文をみて撃沈。

そこには、

「て、これ“フェルマーの最終定理”だろ！！！！？解けるかこんなん

「！！！」

数学者の天才でも6年はかかった問題をたった10分で片付けると！！？

前はそうでもなかったのに、この学校に来てからどうやらツッコミの才能でも目覚めたのか、そのせいで思わずテスト用紙にツッコんだ。

すると、先ほどまでカリカリと書き込んだりする音しかしなかったその場がシン・と静まりかえり、クラスメイトはもれなく俺のことを凝視していた。

しまった・・・！！

目立つ行為などできる限り避けたかったが、これはどう考えても目立ってしまう。と、というか目立ち過ぎだ。

俺は、クラス全員（一名除く）の視線を一身に受けながら、この状況をどう打破するかと一生懸命考えていると、先ほどまで椅子に座りふんぞり返っていたじじ・・・じゃなくて数学の先生が

「そのチミイ！！！！」

なんとも古臭い呼び方で俺を指さしてきた。

ヤバい。ヤバすぎる。

先生がこちらにツカツカと近づいてくるのを、俺は死のカウントダウンのように聞きながら、冷や汗を流していると、目の前にたった先生が突然俺の肩をぐわしっと捕まえる。

「チミイ、名前は？」

「お、大河恭詩やすしです……」

そう名乗ると、じじ・先生は俺をじろじろと見てくると、急に懐  
に手をつ込み、そこからなにかを取り出して俺に突き付けた。  
突然の行為にビクツとした俺だが、そこにあっただのは

「ごーっかく！」

「はあ？」

数学係、と書かれたネームプレートだった。

「あ、あのー……先生？すみません、いまいち理解が追いつかな  
いんですが……」

「ん？まあワシもこんな風習この学校が初めてじゃったからのお。

よし、残り時間はテストをやめて説明いたそう！」

いたそう！じゃねーよクソジジイ！！

俺のドツキリかえせ！！

すこし……というより物凄く殴りたい衝動を抑え、クソジジイの  
話を聞くに、この学校では教科のかけりはその教科の先生が決める  
という。

やはり相性やお気に入りに入り、というほうがやりやすかったりするのだ  
ろう……

そんなこんなで、この先生は毎回このように悪戯をしかけては、そ  
の反応が面白かった生徒に係を押し付けるといってもない奴だ  
った。

説明をし終わると同時になるチャイムに、先生はついでにテストを



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0856i/>

---

誰か続きを書いてくれシリーズ

2010年10月9日05時50分発行